

体験版

エンジニアありさ、

淫らな三百六十五日

シリーズ1
私の部屋で、部長に溶かされて

朝倉 楓
Kaede Asakura



体験版

エンジニアありさ、淫らな二百六十五日

シリーズ1

私の部屋で、部長に溶かされて
第一巻（全三巻）

©2025 朝倉 楓 All rights reserved

無断転載・二次利用を禁じます。

この物語のあらすじ

遠距離恋人がいながらも——ありさは上司・佐藤の低く甘い声と指先に溶かされていく。

歓迎会の帰り道、彼を部屋に招き入れた「あの一瞬」。そこから彼女の恋も道徳もすべてが崩れ始めた。

触れられるたびに震え、絡む舌の深さに心まで奪われ、ありさは初めて知る快楽に堕ちていく。

禁断のレッスンが始まる、背徳の物語・第一巻。

本作はフィクションです。登場する企業・団体・人物はすべて架空であり、実在のものとは一切関係ありません。

A grayscale illustration of a young woman with short, wavy hair and round glasses. She is smiling slightly and looking towards the viewer. She is wearing a dark-colored bra with lace trim and a light-colored button-down shirt that is open at the collar. Her hands are visible, holding the edges of the shirt.

目次

Day 0	歓迎会の夜……………	4
Day 1	ディープキス……………	8
Day 2	乳首責め……………	16
Day 3	パイズリ……………	23

Day 0 歓迎会の夜

私の名前は白沢ありさ。

札幌市北区出身。

オーロラ・エレクトロニクス株式会社の開発本部に在籍している、エンジニア。彼は同じ大学の同級生、須藤ダイスケ。

軽音部の音響係で知り合って、機材運びを手伝ってくれるうちに付き合い始めた。

卒業式の日、「遠距離になっても絶対続けるから」って泣きながら約束した。

ダイスケは札幌の半導体メーカー、私は神奈川のオーロラ・エレクトロニクス。月に一度は会おうって約束して、新千歳空港でキスをした。

今は神奈川県茅ヶ崎市、北茅ヶ崎駅前三十秒の築十八年2LDKに住んでいる。リビングには自分で組んだLEDスポットライト、寝室には手作りの星型照明。

冷蔵庫にはダ이스ケとの写真が二十枚以上貼ってある。

毎週土曜の夜は必ず長電話。

「ありさ、ちゃんと寝てる?」「寒くない?」

って優しい声に、私は「早く会いたいね」と返して、「画面越しのキスで我慢してた。

でも……

入社してまだ三週間目の歓迎会の夜。

ゴールデンウィークの直前だった。

私は部長、佐藤悠人さんに送ってもらって、この部屋に招いてしまった。

「少しだけ……お茶でも飲んでいってください」

自分でも信じられない言葉が、ぽろりとこぼれた。

鍵を開ける手が震えた。

玄関のセンサーライトが点くと、キャラクターのスリッパが妙に恥ずかしく見え

た。

佐藤さんがコートを脱ぐ音が、静かな部屋に大きく響いた。

「狭くてごめんなさい……」

「いいよ、とても可愛い部屋だね」

佐藤さんはリビングのLEDスポットライトを見て、感心したように微笑んだ。

冷蔵庫から麦茶を出して、ふたりでソファに並んで座った。

ダイスケとの写真が目に入って、胸がチクツとした。

でも、なぜか目を逸らせなかった。

沈黙が少しだけ続いて……

「……今日は楽しかったね」

佐藤さんがぼつりと言った。

その瞬間、ふと目が合った。

佐藤さんの瞳が、いつもより少しだけ深い色に見えた。

（だめだよ……私にはダイスケがいるのに……）

頭ではわかってる。

でも、心臓がどくん、どくんと暴れてなぜか身体が動かない。

佐藤さんの指が、そっと私の頬に触れた。

温かくて、少し震えてた。

「……白沢さん」

名前を呼ばれた瞬間、私の心の鍵が、カチリ、と音を立てて外れた。

その夜から、この北茅ヶ崎の2LDKは、毎週木曜日、佐藤さんが来る場所になった。

そして私は、少しずつ、少しずつ、『別の自分』に変わっていった。

Day 1 ヱイープキス

二〇二三年五月十一日 木曜日

ゴールデンウィーク前の歓迎会からちょうど二週間後。
夜遅くにインターホンが鳴った。

「白沢さん、こんばんは。」

私は素足で玄関に駆け寄り、チェーンロックを外す手が震えた。
ドアを開けると、佐藤さんが立っていた。

ネイビーのスーツがビシツとキマっている。

いつもより少しだけ疲れた顔で、でも優しく微笑んでいる。

「今日は……残業で遅くなってごめんね」

「い、いえ……どうぞ」

リビングの明かりは、いつものLEDスポットだけ。

暖色に落としてあるから、部屋が柔らかくオレンジに染まる。

佐藤さんはネクタイを少し緩めながら、ソファに腰を下ろした。

私は冷蔵庫から麦茶を出して、隣に座る。

距離は、三十センチくらい。

ダイスケとの写真が視界の端でチラチラする。

沈黙が続いた。

佐藤さんが、ふっと息を吐いた。

「……白沢さん」

呼ばれた瞬間、胸が締めつけられた。

「先週の夜……覚えてる？」

私は小さく頷いた。

覚えてる。覚えすぎてる。

あのとき、頬に触れられただけで、頭が真っ白になったこと。

帰ったあと、一睡もできずに何度もダイスケに電話をかけて、でも繋がらなくて、泣きながらオナニーしたこと。

「俺……白沢さんのこと、気になってたんだ」

佐藤さんの声が、少しだけ震えていた。

「でも、君には彼氏がいるって知ってる。でも……」

私は息を呑んだ。

（だめだよ……ダイスケがいるのに……）

でも、身体が熱くて、動けない。

佐藤さんがゆっくりと顔を近づけてきた。

距離が縮まって、息が触れる。

そして、そっと、唇が重なった。

最初は触れるだけ。

柔らかくて、温かくて、少しだけコーヒーの香りがした。

唇が重なったまま、佐藤さんはゆっくりと舌を私の口内に滑り込ませた。

最初は先端だけで、私の舌を探るように優しく触れて、すぐに私の舌を巻き込むように絡め取る。

（続きは本編で……）